



大連の割り箸産業

BY DALIAN OFFICE

私達が何気なく使っている割り箸について、そのほとんどが中国からの輸入品であることをみなさんはご存知でしょうか？日本の間伐材で作られていると思っていた人も多いかと思いますが、10年ぐらい前からほとんどが中国製となっているようです。ただ最近の新聞記事によると、中国から大幅な値上げの要求が出てきており、割り箸の使用に波紋を投げかけています。また中国国内(遼寧省、山東省など)でも環境保護の為に割り箸の使用を控えようという動きが出ています。

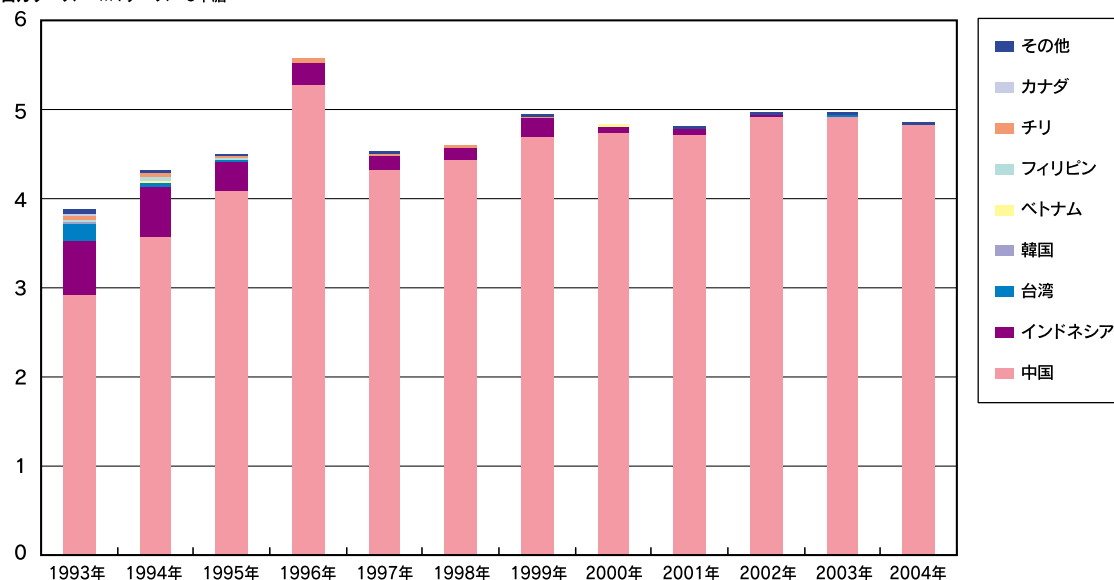


そこで、今回は中国の割り箸産業の実情についてレポートしたいと思います。

1. 日本の割り箸について

日本固有のものに思われている感もある割り箸は、以前は北海道や奈良などで生産されていましたが、現在、ほとんどが輸入品となっています。1980年代後半までは輸入品と国産品の割合はほぼ同じだったのですが、1990年代になると輸入品が徐々に増え、現在では95%以上が輸入品です。輸入相手国は、もともと韓国が多かったのですが、韓国でも割り箸が普及するとインドネシアなどの東南アジアに生産が移り、その後、価格競争力の強さから、ほとんどが中国製となりました。現在の日本では、比較的高級な割り箸の製造が主となっています。

百万ケース ※1ケース=5千膳



割り箸の主な輸入相手国

(日本割箸輸入協会資料より作成)

2. 中国での生産状況

中国で生産されている割り箸は、木製のものと竹製のものとに分けられますが、そのうち木製のものが約80%を占め、ほとんどが中国北方で生産されています。木製の割り箸の多くは、シラカバ、アスペン、エゾマツを原料としており、黒龍江省や吉林省、内モンゴルあたりの森林から伐採されます。製造コストの面から、中国では一本丸ごとを割り箸の材料としており、伐採した原木を適当なサイズに裁断し煮沸して柔らかくした後、機械で桂剥きのようにして板にし、そこから割り箸の原型を作り出します。黒龍江省や吉林省の内陸の工場で原型まで加工した後、日本への輸出基地である大連で最終加工や袋詰めを行います。生産された割り箸は異物の混入や品質をチェックされ、合格したものは大連から輸出されます。日本の品質基準に満たないもの(使用には問題ないが節や斑点があったりするもの)は中国国内に供給されており、ときおり中国の食堂では「おてもと」と日本語で印刷された袋の割り箸を見かけることができます。



割原木から板を削り出す様子（日本割箸輸出協会HPより）

竹製の割り箸は、中国南方の長江付近で生産されていますが、生産効率が悪いことやカビが発生しやすいこと、箸以外の竹製品を製造するほうが利益率が高いことなどから生産量はあまり増えていないようです。

3. 今なぜ値上げか？

中国製の割り箸は低価格を武器にして日本市場を開拓してきました。ところが、昨年からは中国の割り箸輸出業者は2度に渡って日本向け割り箸の輸出価格引き上げを通告してきました。使用量のほとんどを中国に頼っている状態の日本としては受けざるを得ない状況です。なぜ値上げなのでしょう？

その主な原因は製造コストの高騰です。今まで、中国製の割り箸は輸出が始まった頃に比べると価格を大きく下げて、日本市場でのシェアを伸ばしてきました。価格の安さの背景には、製造・労働コストの安さや、円高の進行があげられます。しかしながら、最近では、主要な原料であるシラカバなどが、住宅用に使用されるようになり、また環境保護の面から森林の伐採が制限されたことから原木価格が高騰してきました。もともとシラカバは建築材料に使われることが少なかったため価格が安かったのですが、現在は住宅投資ブームによる住宅建設の急増を受け、フローリングや家具の表面などに使われるようになっていそうです。労働コストや電気代も上昇しており、価格競争で下がりきった今の価格では割り箸業者が生きていけなくなってきました。最近の値上げ要求となったものです。大連の割り箸業者の方からお話を聞いた際、「割り箸は価格競争で安くなりすぎている。日本の業者は一度調達した割り箸を持ってすぐに別の工場に行き、同じものを安く作るように交渉していく。こういうことを頻繁に行う業者もあり、これでは信頼関係が築けない。今回の値上げは下がりすぎた価格を適正なものにしてほしいだけだ」という声がありました。中国側の話を鵜呑みにするわけにはいきませんが、利幅の薄い商売になっているのは確かなようです。

4. 今後の動向

急激に成長している中国では、現在、自国の資源確保に非常に熱心になっています。自

国での需要が急速に伸びつつある中で、川砂や木炭、希少金属などの輸出に制限をかける動きも出てきており、森林資源も同様の傾向にあります。割り箸の製造に使われているシラカバは40～50年、アスペンは30～40年の年齢のものを使うのが一般的ですので、植林してもなかなかすぐに増えるものではありません。こうした状況から見ると、今後、中国からの調達は今より困難になるかもしれません。しかしながら、中国の割り箸業者にとって、対日輸出が売上のほとんどを占めるといっても過言ではない状況なので、輸出禁止若しくは制限となると死活問題となってきます。



割り箸の包装及び検品現場
(下から光をあて異物混入の有無を確認)

そこで、割り箸業者は今、2つの面から活路を見出そうとしています。1つ目は原木をロシアなど他国から輸入し、生産することです。既にロシアからの木材輸入は始まっていますし、ロシアに工場を設置するところも出ています。2つ目は割り箸の材料を木から他の原料に切り替えることです。米粉、澱粉、木屑などで現在開発が進められており、ある企業では今年中には新製品を発表できると言っています。

5. 最後に

今回の値上げ騒動で、日本で使われている割り箸のほとんどが大連から輸出されていることがわかりました。また、その原材料は中国東北部の森林だけでなく、ロシアから輸入されているものも多いという事実は興味深いものです。中国東北部ではロシアとの国境貿易がかなり盛んになってきており、黒龍江省などはインフラの整備にも力を入れ始めているようです。こうした動きをふまえて、大連の背景を中国東北部だけでなくロシアも含めたところを考えれば、いろいろなビジネスの可能性が出てきそうです。日本企業にとってロシアは未知の部分が多い国ですが、既にロシアを開拓しつつある中国企業と協力しロシアとの取引を考えてみるのもいいかもしれません。

ふくぎんからのお知らせ

海外ビジネスでお困りの事はありませんか？

- 海外に進出したい。
- 製品の生産を海外に移管してコスト削減を図りたい。
- 海外に設立した現地法人の労務管理がうまくいかない。
- 海外工場の生産効率を高めたいがどうすれば良いだろう。 etc.

当行では駐在員事務所や専門コンサルティング会社を通じて、海外ビジネスにまつわる様々な問題の解決をお手伝いさせていただきます。海外ビジネスに関するお悩み、お困りの事がございましたらお気軽にお取引店、国際業務企画室までご連絡下さい。